服飾刺繍に関する一考察
―― 18世紀の宮廷服から ――

A Study of Embroidery in Dressmaking
―― Court Costumes in the Eighteenth Century ――

泉　山　幸　代
Sachiyo　IZUMIYAMA

I はじめに

刺繍とは布地に糸と針を用いてほどこす一種の装飾芸術である。一針一針縫いあらわされる刺繍がいつの時代においても服飾の加飾に大きな役割を果たしてきたことは，現存している多くの衣服実物資料の刺繍飾りからも判断することができる。この服飾刺繍の文様，糸，技法，色合いは衣服の形態と密接な係わりをもちながら，その時代の特徴を的確に表現していることも実物資料により明らかである。

本研究の目的は18世紀の，刺繍技法が熟達し完成期を迎えたロココ期における刺繍に焦点をあて，服飾刺繍が当時のどのような状況で発展していったのかを明きらかにし，また刺繍技法が顕著に示されている宮廷服実物資料*を用いて，18世紀服飾刺繍の特徴，ステッチ技法，及びそれらの製作過程の史的考察を行うことである。またこの18世紀の刺繍技法が様々な展開を経て，名称は変化しつつも現在の刺繍技法の基であることの裏付けを行うことも狙いとする。

II ロココ期の服飾刺繍

18世紀における文化の主流はフランスであり，中でもヨーロッパ諸国においてパリがモードの中心地であり，服飾文化の担い手とされた。この華やかなロココ時代の特徴は，前時代のバロック様式の荘厳，豪華さとは異なり繊細，優美な装飾の強い様式であった。

服飾においてもロココ期の芸術性豊かな感覚は如実に表現されており，衣服のシルエットはバロック時代の重厚な線と比較して，繊細流麗な曲線となり，文様，装飾技法はロココ期の中でも年を追うごとに洗練されたものとなる。縫製技法は次第に高度化し，製作工程は専門化，細分化された。その結果として衣服は精巧な芸術作品の域にまで達する。この過程において装飾技法としての刺繍が大きな役割を果たしたであろうことは以下のことから推測できる。一つには現存するロココ全盛時代の実物作品であり，もう一つには数多くの工房が刺繍に従事し，質を競いあったという記録からである。[1)]

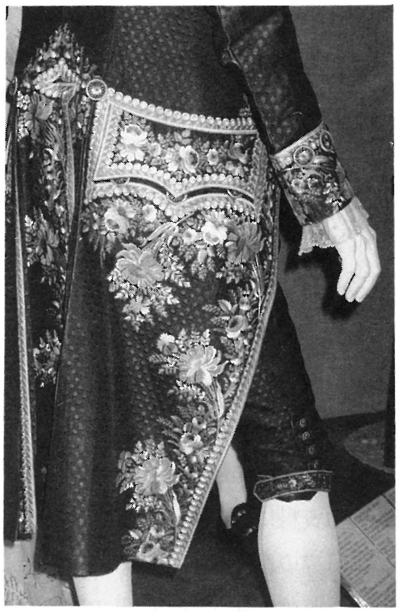
＊　本研究で用いた実物資料はヴェクトリア・エンド・アルバート美術館所蔵の実物作品をさす。

1．男子宮廷服にみられる服飾刺繍

18世紀の男子服はアビ・アラ・フランセーズ（長上着），ヴェスト（チョッキで長胴衣），キュロット（半ズボン）の組み合わせからなり，これが18世紀を通して礼服として用いられた。初期の長上着は細胴と腰の脹らみ，腰から裾にかけての曲線が美しく，後半になると高い立ち衿がつき，前身頃の打ち合いは胴から裾にかけて少しづつ斜めに切り落すという斬新なデザインである（写真1）[註]。上着の刺繍は曲線指向を反映してか，曲がった花文様を衿から前端，裾にかけてヘムライン，背のスリット，ポケットの縁，袖口の幅広のカフス部分にと調和よく配置されている（写真2）。バロック時代の衣服にみられるような布全体を豪華な刺繍で覆いつくすという重苦しさはない。長上着とヴェストは同じ図柄の刺繍は使われていても異なった生地や色を用いたり，或いは全く生地，図柄を違うものにしてコントラストを楽しんだ[2)]。長上着，ヴェストとも前中央には多くのボタンがならび，そのボタンにも上着，ヴェストと同じ図柄の刺繍がされ，又キュロットの裾のわずかな部分にも刺繍を使うなどロココ特有の繊細さが表現されている。表地の素材はサテン，錦などの絹織物で，刺繍糸は上質の絹糸，金銀糸，シュニール糸が使われていた。

写真1　アビ・ア・ラ・フランセース1790年

写真2　写真1の背面



2．女子宮廷服にみられる服飾刺繍

18世紀の女子の服装は1718年あたりから現われ始めたパニエ（別称サイド・フープ）に代表される。特に1740年以降からは両脇にパニエをつけた横広がりのスカートが流行し，宮廷の公服として大型，楕円形のパニエが用いられた。そして胴をコルセットで細くする。細い胴と太い腰はロココの女性美として重要な要素であり，その着装形態であるローブ・ヴォラントは服装史上最も洗練された美しい衣裳であるといわれる（写真3）。その理由は形態そのものの美しさと共に，ロココ期の特徴である装飾技法ーリボン飾り，ファルバラ（布製の飾り），花飾り，縁どり，金銀シュニール糸，レース，組み紐，刺繍など多くの技法がバランスよく配置されていることにある[3)]。中でも特に刺繍はロココ期の衣裳には欠かすことのできないものであった。刺繍は胸元とスカートに集中しており，花文様を用いることを保持しつつも年代によって小花，

花束，花籠，花づな模様と変化し，流麗な美しさを見せている。表地の素材は，ビロート，緞子，紗など，刺繍糸は多色にわたる絹糸，金銀糸，シュニール糸，金銀のスパングルを用いて華麗さを極めた。

写真3　ローブ・ヴォラント　1778年

Ⅲ 花　文　様

ヨーロッパの宮廷服を飾ったロココ期の服飾刺繍の文様には花文様が圧倒的に多い。その理由と定着に至る過程をたどってみる。又この時代の精巧な刺繍作品を作りあげた刺繍師についても考察する。

1．花文様と刺繍師

ロココ期以前のヨーロッパにも花の装飾文様はあったがキリスト教の影響下にあり，教会刺繍の脇役でしかなかった。その後次第に花模様は使われるようになってきたが，例えば16世紀の花文様はオリエントからの伝来をそのまま模した感が強い。そして18世紀に入り，ロココ期に至っての花文様はやや中国の影響を受けながらも，ヨーロッパ独自の展開をみせていくのが特徴である。展開過程にあって大きく影響を及ぼしたと考えられることに，ルネッサンス以降の植物学研究の進歩と多くの植物図鑑が刊行されたことがある[4]。庭園が整備され種々の花を栽培できるようになったことも起因の一つにあげられよう。ヴェルサイユ宮殿の庭園や温室では諸外国からとりよせた新種を含めて200万鉢もの草花が栽培されており[5]，多くの図案製作者は花々を構成図案化するために必要な資料をこの宮殿の庭園から得た。このような状況下にあって，有能な刺繍師によって技法は最高の水準にまで達し，刺繍技法の完成期を迎えるようになるのである。

フランスにおいて刺繍を職業とする刺繍師は14世紀から15世紀にかけて現われた。彼らは王候貴族に雇われ衣服は勿論，帽子，手袋にいたるまで刺繍で飾った。18世紀になると衣服の装飾は刺繍師に特別注文されるようになるが，これは仕立てに手のかかるロココ期の衣裳が専門分化して縫製されたためである。図案家がデザインした下絵を刺繍師は絶妙な感覚と職人気質で，そして贅をつくした素材で作りあげていく。この時期刺繍生産の中心はリヨンであり，イングランドでは衣服の刺繍部分はフランスに注文するのが流行していた。刺繍に関しては男女の労働力が使われ，1778年のリヨンでは６千人の女性刺繍師を有し当時としては女性が最も多くの収入を得る仕事だったとの記録も残されている[6]。このように18世紀の刺繍師達は熟練した手先で，彼らの技法は頂点に達していたのであろう。

2．花文様の推移

ロココ期の花文様はその年代によって変化を見せる。まず絹織物のデザインには写実的な花

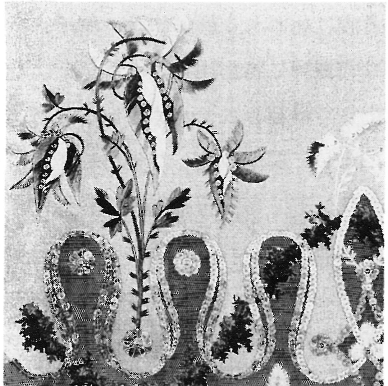
模様，ロココ特有の繊細さを表現した小花模様，曲線の中に展開する花模様などが見られる。この絹織物のデザインの変化は服飾刺繍にも影響を及ぼすことになる。1730年代のドレスにはスカートの部分に刺繍がほどこされている（写真４）。絹地に金属糸を使ってステム・ステッチ，ロング・エンド・ショート・ステッチ，ファーン・ステッチを用い，多色の絹糸で濃淡をつけて花の種類が判断できるほど実物の花に近く表現している[7]。1740年代になると，花模様はロココ期の装飾モチーフであるカルトゥーシュ模様（変形した額縁模様）の中で使われるようになる。カルトゥーシュは始めは角ばっていたが除々に柔らかな曲線となり，花の茎は短かくなり余分な葉はとり除かれるなど次第に様式化していく。1750年代のドレスの刺繍は，交錯したリボン状の格子の中の様式化した花模様が特徴である（写真５）。多色の絹糸を用い，ロング・エンド・ショート・ステッチ，サテン・ステッチ，フレンチ・ナッツの技法が用いられている[8]。1760年代になると曲線模様の影響と思われる花づな模様が流行する。この時期になると次弟に花模様は繊細で洗練されたものとなる。18世紀の後半に作られたドレスの裾飾り刺繍には，花の散らし模様と連続模様や花束，花づな模様が用いられ，レースリボン飾りやスパンングルもつけられかなり装飾的である（写真６，７[9]）。

写真４　写実的な花文様　1730年代

写真５　曲線模様の中の花文様　1750年代

写真６　花の散らし模様，連続模様　18世紀後半

写真７　花束，花づな模様　18世紀後半



Ⅳ　実物資料・技法・試作

1．宮廷服実物資料の考察

ヴィクトリア・エンド・アルバート（以下Ｖ &A という）美術館所蔵のロココ期宮廷服の実物資料及び文献史料から，それらの形態，刺繍技法及び刺繍製作の歴史をたどってみた結果，次に述べるような事柄が推測される。

◦実物資料Ａ　マンチュア*　1740年～1750年　イギリス（写真８，９）

写真８　実物資料Ａ　1740年～1750年

写真９　実物Ａのスカート裾の刺繍部分拡大

素材：緋色の畝織の絹を表地とし，裏は白の絹を使っている。

形態：ロココ期1740年以降にみられる宮廷服の特徴を顕著にあらわし，両脇にパニエのある横広がりのスカートは一番広いところは６フィートある。スカートは７面で構成されスカート全体に刺繍飾りがある。上衣は広い幅のスカートと調和がとれるように２本のプリーツが肩からウエストラインまで入っている。袖は肘丈で細い折り返しのカフスがつき，肘を曲げた状態でもゆとりがある袖口にはフランス製のニードルレースがつき，レースは衿のトリミングにも用いられている。

刺繍：図案は「Tree of Life」という名前がつけられており木，花，フルーツをモチーフとしている。模様は銀糸のみで刺繍され，刺す箇所によってステッチの種類，糸の本数が異なる。花，葉の部分には量感をだすために芯（絹芯，銅芯であろう）又は糸での台刺しが入っていると思われる。ここで使用されている銀糸とは絹糸に銀箔をまきつけた金属糸のような糸で，このドレスの為に使用した銀の量は10ポンド以上との記録が残っている。ステッチ技法は花，葉の部分は幅のひろいサテン・ステッチ，茎はステム・ステッチ，葉をルーマニア・ステッチ或い

＊　マンチュアとは17世紀末から18世紀中頃にかけての婦人用 loose gown の呼称

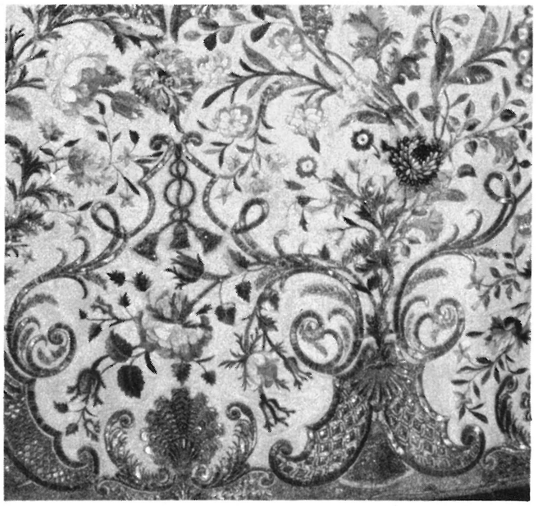
はファーン・ステッチで葉脈のように浮き立たせる手法をとっている。主にサテン・ステッチ，コーチド・ワークを用い，銀糸は量感を出すために方向を変えたり，曲線を描くなど地埋めの部分に変化をつけており立体感をだすための技量が見られる。表地の深紅色と銀糸，そして刺繡模様が調和したロココ期現存している史料を代表する作品である。

過程：資料Ａには王室刺繡師による製作を裏づける事柄が記されている。裾の裏側刺繡の下に青インクで“Rec'd of Mdm Leconte by me Mogd. Giles”の記録がある。この時代刺繡師の名前が銘記されていることは珍らしい。Leconteは1710年から1746年まで王室の刺繡師であったこと，Giles一家が刺繡の下請け仕事をしていたとの記録が残されており*，又1746年から1747年にかけては女性刺繡師が携わっていることも明らかである。このように実物資料Ａは多くの優秀な刺繡師によってかなりの歳月を費して作られたということ，着用者は不明だがこの豪華さ，形態から宮廷服と判断することができる。銀糸で刺繡をしたその下には刺繡師達の迷い，苦心が推測できる多色の絹糸で刺した形跡が見られる[10)]。

◦実物資料Ｂ　マンチュア　1744年　イギリス（写真10，11）

写真10　実物資料Ｂ　1744年

写真11　実物Ｂのスカート裾の刺織部分拡大



素材：表地は白の畝織の絹で裏は白い絹がついていた形跡がある。

形態：実物資料Ａと同じく1740年代のロココ調の形態で，スカートは７面で構成され，中のパニエは両脇の幅を狭くしたボーンで形づけられた楕円形で横幅は５フィートある。

刺繡：スカート全体，上衣の縁どり，折り返しの深いカフスに同じ図柄の刺繡がある。図柄はロココ期前半に流行した写実的な花文様で，実物の花の種類の判断を可能にしている。バラ，

＊　English Hugnenot 協会の記録

ポピー，カーネーションや朝顔，ジャスミンと思われる花々を題材にし，花が自然に咲いている様を生き生きと表現している。それは色合いにも現われ，花の部分は多色の絹糸で自然色に近く仕上げ，葉，茎の部分は銅芯を銀糸にまきつけたような金属糸を使っている。技法は花の部分はロング･エンド･ショート，花芯はフレンチ･ナッツ，茎はステム･ステッチ，葉の部分はコーチド･ワーク，サテン･ステッチで刺されており，葉と裾の縁飾り部分には量感を出すために芯を詰めて，その上からステッチをかけて立体的に仕上げている。

過程：実物資料Ｂは1744年５月14日，Sir William Courteneyの５番目の娘Isabellaが婚礼の際に着用したことが明きらかである。スカートの刺繍を見ると上部と下部（裾の部分）とでは出来上りが一定ではなく，刺繍師の工程記録には上部の刺繍は裾の刺繍部分と比べて極端に不出来であると指適している。これは刺繍過程の前半，スカート下部分は刺繍師が刺していたが，後半のスカート上部分の刺繍は，何らの理由により花嫁，花嫁の姉妹，花嫁の友人に委ねられていたという経過による[11]。こと事柄は当時の女性の教養として刺繍技法を身につけることが嗜みとされていたということの裏づけであり，刺繍部分の出来上りが明確に異なるということは，刺繍師の技量を示すものと考えられる。

。実物資料Ｃ　男性用長上着　1790年頃　フランス（写真12・13）

写真12　実物資料Ｃ　1790年

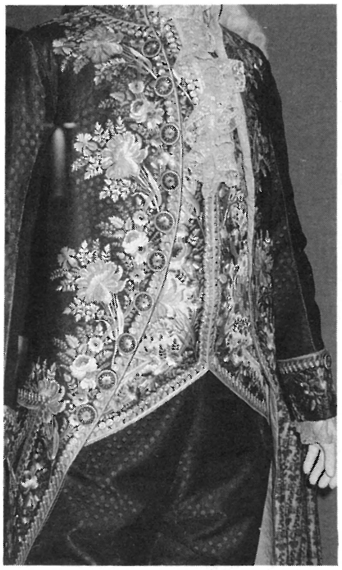


写真13　実物Ｃの前身頃刺繍部分拡大

素材：上着と半ズボンは水玉の地模様のある綾織紺色のシルク地，ヴェストは白のシルク地を使用している。

形態：ロココ期の男子服の形態であるアビ・ア・ラ・フランセーズ（写真１参照）

刺繍：図案は1780年代にフランスでデザインされたもので，ロココ期後半の様式化した花文様の特徴を表わし，道に咲いている草花を幻想的にアレンジしている。花の図柄は衣服全体のバ

ランスを損なうことなく，大きさ，分量とも調和がとれ，特に上着打合い曲線部分の角度を考慮した花の配置や，背面のスリット及びウエストラインの花の配置には目を見張るものがある（写真2参照）。刺繍における花の部分の多くはサテン・ステッチで刺されており，わずかに茎の部分がステム・ステッチで芯は使用していない。刺繍糸は多色の絹糸と銀糸が用いられているほか，縫製による縫目の一部分と裾の縁どりには銀糸のスパングル，鉛ガラスが用いられ華やかさを増している。

過程：刺繍，縫製ともフランスで製作されている。特に装飾部分はフランスで製作させるのが当時のイギリスの流行であり，人々は好んでフランス製の装飾のついた衣服を着用した。[12] ロココ期では宮廷礼服長上着には刺繍が施されていることが，宮廷服としての必須条件であり，宮廷服の格が刺繍によって決定づけられたとも言われる。[13] このことが刺繍技法を発展せしめる大きな要因となった。

2．技　法

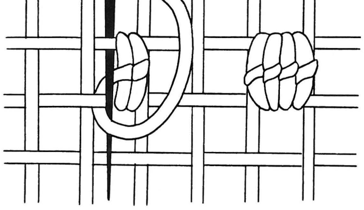
実物資料Ａ・Ｂ・Ｃに代表されるＶ&Ａ美術館所蔵品をみると，ロココ期実物資料の服飾刺繍部分のステッチ技法が示しているように，一つの作品の製作過程には多種の技法が用いられ，ステッチ技法の選択はその時期の様式を的確に表現していると考えられる。次に18世紀の衣服実物資料の服飾刺繍に用いられている特徴ある事柄について列記する。

◦刺繍技法

16世紀から17世紀の初めにかけて重要とされるステッチ技法の主なものには，テント・ステッチ，クロス・ステッチ，ロング・アーム・ド・クロス・ステッチ，チェーン・ステッチ，ボタンホール・ステッチ，コーチング，シーディング，フレンチ・ナッツ，ロング・エンド・ショート・ステッチ，バック・ステッチ，サテン・ステッチなどがある。[14] 18世紀にはこれらのステッチ技法がより装飾的に展開していくことになる。特徴ある技法について以下に述べる。

- ロング・エンド・ショート・ステッチ　　写実的な花を表現するのに用いられた技法である。多種の絹糸を本数を変えて（４本～１本）刺し，花葉の濃淡を現わしている。16世紀に生まれた技法だが少しづつ変化し，18世紀に完成した。
- サテン・ステッチ　　布地の表面及び裏面を糸で覆う技法でロココ期服飾刺繍に多く用いられた技法である。モチーフの立体感を表現するために絹綿，紙（犢皮紙，ベラム紙）[15]，銅芯などの詰物を入れる場合がある。
- ロココ・ステッチ　（図１）　　17世紀の初めに，主にキャンバスワークに用いられていたロココ期の特徴というべきスチッチで，小さなステッチの束を１本づつ中央に引き締める技法である。[16]
- チェーン・ステッチ　　18世紀以前には様々な変形がみられたが，18世紀には現在の技法が完成し服飾刺繍として多く用いられた。1760年以降はヨーロッパに中

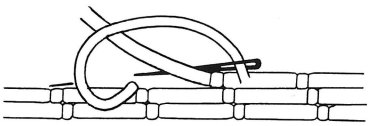
図１　ロココ・ステッチ



国の方式が入り細い鉤針を使う場合もあった。

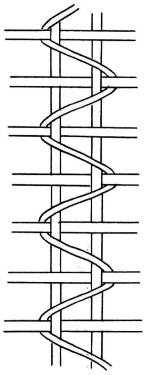
• ステム・ステッチ　　ロココ期図案の特徴である曲線模様（カルトウーシュ模様，花づな模様）や細い枝を表現するのに用いられた技法である。後にアウトライン・ステッチと呼ばれる。

図2　コーチド・ワーク



• コーチド・ワーク（図2）　　コーチングともいわれ太い金糸の束を2～3束一緒に1回のステッチで平らに縫いつける技法である。金糸刺繍による地埋め部分に多く用いられ，ステッチの間隔を変えることにより刺繍表面の模様表現が可能である。[17]

図3　シュニール糸



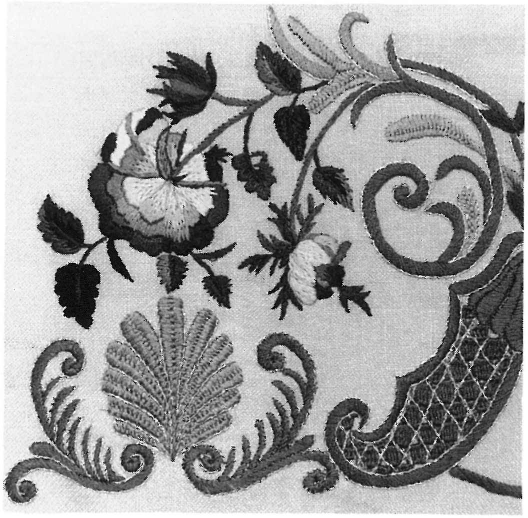
◦ シュニール糸　（図3）　　装飾用の毛虫糸，モール糸のことをいう。17世紀末に作製された糸で製作工程は「2本から6本を単位にして，毛羽の長さに応じた間隔をおいて整経された経糸のグループが紗のように綟り織される。織り上げられたものは経糸にそって細紐に切り分けられ，経糸と緯糸として用いる」（マンチェスター染織研究所の解説）とある。[18] ロココ期の服飾刺繍の糸として多く用いられている装飾糸である。

3．試　　作

18世紀に用いられていた技法の一部を再現することを目的とし，実物資料Bのスカート裾の一部分について，実物と同じ図案を用い可能な限り類似した技法による刺繍の試作を行った（写真14）。図案及び，ステッチ技法，使用糸，糸の本数は図4，表1に示す。その結果をまとめると次の通りである。

図中①，③の試作に当って最も困難であった点は量感をいかに再生するかであった。今回は造花用のワイヤー3本をコーチング・ステッチでとめ，その上をサテン・ステッチで刺し，さらにその上を①はロココ・ステッチ，③はルーマニアン・ステッチを試みたが，当時の優れた技法をそのまま再現し，立体感を出すには至らなかった。図中④，⑤は自然の花の色に近づけるため多色の刺繍糸を使用し，ロング・エンド・ショート技法を用いて，糸の本数は4本から1本と刺す箇所によって本数を変えて刺繍した。刺繍糸は当時の糸とは異なり，銅芯を銀糸にまきつけた金属糸は同じ素材が，入手不可能であったため，市販のフランス刺繍糸，及び日本

写真14　試作



刺繍糸を使用した。

図4　試作の図案（実物資料Ｂ実寸の$\frac{2}{3}$大）

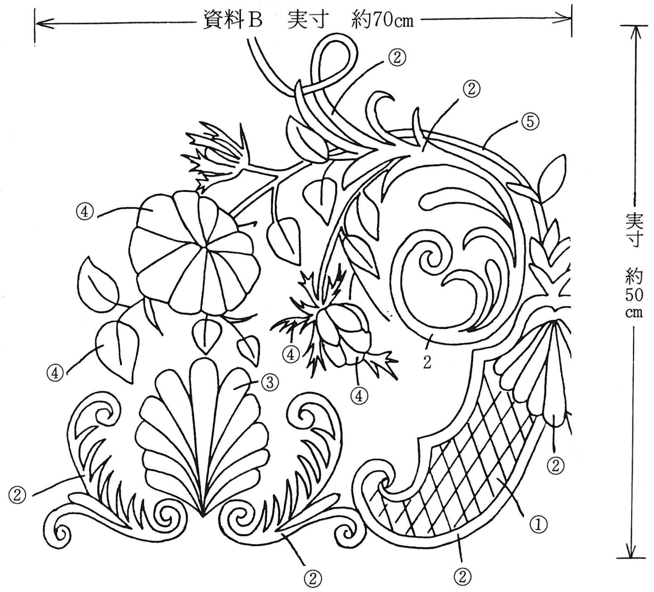


表1　試作の刺繍技法と使用糸

刺繍箇所	刺　繍　技　法	使　用　糸（コスモ）	本　　数
①	ロココ・ステッチ 中芯｛造花用ワイヤー３本をコーチングでとめる 　　　サテン・ステッチ	715, 714	３本どり
②	サテン・ステッチ アウト・ライン・ステッチ（図柄周囲）	715, 714 日本刺繍糸銀糸	4本から1本どり １本どり
③	ルーマニアン・ステッチ 中芯｛造花用ワイヤー3本をコーチングでとめる 　　　サテン・ステッチ アウト・ライン・ステッチ（図柄周囲）	712 日本刺繍糸銀糸	３本どり １本どり
④	ロング・エンド・ショート・ステッチ	花　101, 102, 103, 104, 105 　106, 107, 108, 383 葉　534, 535, 536, 537, 319 　634, 824 萼　119, 318, 319, 536, 823 　844	4本から1本どり 3本から1本どり 3本から1本どり
⑤	ステム・ステッチ	715, 716	３本どり

Ⅴ　ま　と　め

18世紀宮廷服について，服飾刺繍の発展過程と刺繍技法，及びその歴史的背景を実物資料に基づいて考察した結果をまとめると次のようになる。

１）18世紀の宮廷服に服飾刺繍が用いられ発展していく過程には，ロココ期の芸術性豊かな

感覚の反映とともに，衣服形態と文様，図柄の配置，刺繡技法の調和があったと考えられる。

2）男女の宮廷服には刺繡は不可欠の要素であり，その技法は刺繡師により高度化され，現在の技法の基が完成された時期であったと推測される。

3）ロココ期の服飾刺繡には花文様が多く，年代を追うごとに写実的な花文様から，様式化された花文様へと変化を見せる。流行の要因としては，この時期の植物図鑑の刊行と，ヨーロッパ庭園が整備されその花々から，図案製作者がモチーフを得たことが考えられる。

4）実物資料3点から図案，刺繡技法，及び刺繡製作の過程をたどってみると，まず図案には花文様を用い，衣服部分への配置には巧妙なバランスが見られる。次に特徴ある技法としては，地埋め部分にサテン・ステッチ，コーチド・ワークを用い，量感を得るために芯を入れていることである。また写実的な花の表現には，ロング・エンド・ショート・ステッチが用いられ，多色の絹糸を4本から1本どりで緻密に刺繡されている。その過程には，卓越した技術を有する刺繡師の存在を無視することはできない。

5）実物資料Bスカート裾の部分について，再現する目的で試作を行ってみた。最も困難であった点は量感の再現であり，当時の優れた技法がいかに難度の高いものであったかを推察することができた。

最後に本研究の18世紀の刺繡技法，及び試作の刺繡技法について御助言下さいました，戸塚刺しゅう横川美津子先生に深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

1）ジャン＝ミッシェル・テュシュレル：リヨン織物美術館第2巻，学研，1976，p. 250

2）マドレーヌ・デュピェール，石山彰：フランスの衣装と刺繡，学研，1983，p. 147

3）丹野郁：服飾の世界史，白水社，1985，p. 308

4）佐野敬彦：装飾デザイン3，学研，1982，pp. 58～60

5）飯塚信雄：ロココへの道，文化出版局，1984，p. 159

6）上2）の p. 146，p. 158

7）ドナルド・キング：イギリスの染織第1巻，学研，1980，p. 252

8）ドナルド・キング：イギリスの染織第2巻，学研，1980，p. 242

9）上1）の p. 250

10）William Callins：Four Hundred Years of Fashion, V & A Museum, 1984，pp. 22～23

11）上10）の pp. 23～25

12）上10）の pp. 58～60

13）飯塚信雄：西洋の刺繡，日本ヴォーグ社，1976，p. 96

14）Constance Howard：Design For Embroidery, Batstord, 1956，p. 76

15）上2）の p. 145

16）パメラ・クラバーン：手芸百科事典，雄鶏社，1978，p. 228

17）13）の p. 19

18）7）の p. 265

註）写真1，8　Four Hundred Years of Fashion, V & A Museum, 1984

写真3　Moments De, Mode Musée des Arts do la Mode , 1984

写真4，5　イギリスの染織1，学研，1980

写真6，7　リヨン織物美術館2，学研，1976

写真2，10，11，12，13　著者の撮影による

（1987・9・18）